

複合語内部における屈折について： 制約と傾向の観点から[†]

西原哲雄*

序

初期の生成文法理論においては、まず中心となる統語部門があり、音韻部門と意味部門は統語部門に付属するものとして考えられ、形態部門（語形成部門）は自立的な部門としてはみなされておらず、音韻部門の中に含まれていた。しかし、Siegel (1974) や Aronoff (1976) によって形態部門の自立性が認められて以来、生成形態論 (Generative Morphology) はさまざまな批判を受けながらも多くの語形成 (Word Formation) に係わる現象を説明し、発展してきた。

こうした研究の発展の中で、音韻論と形態論の関連性を主張し、語形成過程と音韻規則を順序付け (Level Ordering) した理論である語彙音韻論 (Lexical Phonology, LP) が Kiparsky (1982), Mohanan (1986) などによって提唱された。

この理論では、語形成の派生過程と屈折過程が順序付けされており、派生接辞の内側に屈折接辞が付加されないという一般的な現象を説明している。しかしながら、諸言語を観察すると屈折接辞の外側に派生接辞が付加されるという現象が多く見られ、かならずしも派生-屈折の順序付けが守られていないことが分かる。Perlmutter (1988) などは派生と屈折を同じ語形成過程で行うことを破棄し、派生と屈折を分離する主張をしている¹⁾。

本稿では、屈折接辞が派生接辞の内側に表れる傾向が非常に高いことを指摘しながら、Perlmutter (1988) の主張が適切でないことを論証する。また、最適性理論 (Optimality Theory) による取扱いも試みることにする。

1. レベルオーダリングの語形成

Kiparsky (1982), Mohanan (1986) などによって提唱された語彙音韻論は、語形成に係わる形態部門 (Morphological Component) を独立した部門として認め、語形成過程を4つの層 (stratum) に分割している²⁾。

- (1)層 1 クラス I 接辞による語形成
- 層 2 クラス II 接辞による語形成
- 層 3 複合語形成
- 層 4 屈折接辞付加

クラス I 接辞は強勢の位置決定に関与し、付加された語幹の強勢位置の移動を引き起す。

- (2) *cúrious* → *curiós-ity* I
fínite → *ín* I -*finite*

一方、クラス II 接辞は、付加されても強勢位置に影響を与えることはない。

- (3) *cúrious* → *cúrious-ness* II
fínite → *finite-ly* II

*〒380 長野市三輪8-49-7 長野県短期大学

(1)から、クラスII接辞はクラスI接辞の外側に表れることはなく、また層1, 2で形成された派生語や層3で形成された複合語の内側に屈折接辞が付加されることがないことが分かる。したがって、次のような語が存在しないことが予測される。

- (4) a. *event-less II -ity I
 *employ-ment II -al I
 b. *un II -[color-blind]
 *un II -[shock-resistant]
 c. *teach-es-er II
 *book-s-ing II
 d. *[hands-towel]
 *[flies-paper]

しかしながら、実際にはこれらの順序付けに従わない派生語や複合語が存在する。

- (5) a. develop-ment II-al I
 govern-ment II-al I
 b. in I-[conceive-able II]
 [un II-grammatical] - ity I
 c. non II-[color-blind]
 non II-[shock-resistant]
 d. [arms-merchant]
 [goods-train]

次節では、(5d)などで見られるような、屈折接辞が複合語の第1要素に付加され、複合語内部に存在するような例や、屈折接辞が派生接辞の内側に表れている場合について検討を加えることにする。

2. 屈折による語形成

一般的な語構成の過程としては、(6)のように屈折接辞は派生接辞の内側には決して表れない。すなわち、派生接辞は屈折接辞には付加されないとい

主張されてきた。

- (6) a. Word-Derivation-Inflection
 b. *Word-Inflection-Derivation

(6)bのような構造は一般的には認められないものであるが、イタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、イディッシュ語などでは(7)に見られるように(6b)の構造に従った語が存在する。

- (7) [masculine form] [inflected
 feminine form]
 a.(Fr.) maladroito maladroito+e →
 b.(It.) certo cert+a →
 c.(Sp.) claro clar+a →

- [inflected feminine form+ment]
 → maladroito+e+ment (“awkwardly”)
 → cert+a+ment (“certainly”)
 → clar+a+mente (“clearly”)

- [singular] [plural]
 d.(Por.) flor (“flower”) flor+es →
 e.(Yi.) šure (“line”) šure+es →

- [diminutive (X+inhas) /
 adverb (X+vayz)]
 → flor+ez+inhas
 → šure+es+vayz

さらに、英語やオランダ語、ドイツ語、イタリア語、フランス語の複合語においても、第1要素の名詞に複数を示す屈折接辞が付加されている例が存在している。

- (8)
- a. English: [cloth-s brush]
[park-s commissioner]
[custom-s officer]
- b. Dutch: [dak-en zee] “sea of roofs”
[huiz-en rij] “row of houses”
[sted-en raad] “cities council”
[student-en team]
“students team”
- c. German: [Sonne-n schein] “sunshine”
(n is plural ending of Sonne)
[Bar-en fell] “bearskin”
(en is plural form)
- d. Italian: [cap-i stazione]
“station masters”
- e. French: [des secretaire- s-generaux]
“secretaries-general”
[des basse- s-cours]
“poultry yards”

(7), (8)から、屈折接辞の付加された屈折形 (Inflected Form) が複合語形成や派生語形成の入力となっているとすることができる。このことは、屈折過程と派生過程が同一の部門で行われていることを示している。

3. 2つの屈折接辞

Perlmutter (1988), Anderson (1992)などは、(5)などに見られるような派生と屈折の順序付けが破られている事実から、語形成部門では、派生と屈折は別々に取り扱われるべきだと主張している。すなわち、派生は語形成部門で、そして屈折は統語部門で処理されるべきだと述べている。

(7)や(8)のような諸言語の現象を見ると、派生や複合語内部に見られる屈折接辞は複数を示す屈折語尾であることが分かる。このように複数を示す屈折接辞はその他の3人称単数を示す屈折語尾などの統語部門で付与される屈折接辞とは区別されるものである。Goodglass & Berko (1960)は失語症患者が示す音韻過程で、3人称単数を示す屈折語尾の方が、複数を示す屈折語尾よりも脱落しやすいと報告している。この音韻過程をKean (1977)は、失語症患者にとっては複数屈折語尾は“派生接辞”として取り扱われ、一方、3人称単数の屈折語尾は“屈折接辞”として取り扱われたためであると分析している。すなわち、屈折接辞のほうが派生接辞より語幹から離れているからであると述べている。

失語症患者の音韻過程からも複数屈折接辞と3人称単数屈折接辞は区別されるべきものであることは明白である³⁾。

複数屈折接辞は“派生接辞的”に機能して、複合語形成や派生語形成に係わっていると考えられることができる。また、Jensen (1990)も英語の複数屈折接辞の付加規則は語形成部門(派生)の一部であると述べている。従って、(6a)に示された構造は諸言語についての“傾向”であって、言語自体に課される普遍的で強力な制約ではないと考えられる⁴⁾。

4. 原則と傾向

前節でみた(6)aに示された構造(派生→屈折という順序づけ)が諸言語についての“傾向”であって、強力な制約(原則)でないことはその他の制約(原則)というものが実際には例外なく完全に機能していないことから支持される。例えば、語彙音韻論(Lexical Phonology, LP)の語彙部門における制約(原則)である、構造保持(Structure Preservation, SP)や厳密循環条件(Strict Cyclicity Condition, SCC)などは、前者

が Mohanan & Mohanan (1984) で、後者は山田 (1987) がその不備を指摘している⁵⁾。そして、Mohanani (1988) は、明確に SP が制約 (原則) としてよりも傾向として機能していると述べている。最近、注目をあびている最新の音韻理論である最適性理論 (Optimality Theory, OT) の基本概念は制約 (原則) の順序づけであるが、これらの制約 (原則) もまた、基本的には、破られてもかまわないというものである。そこで、次節では、この最適性理論による取り扱いを試みる。

5. 最適性理論

最適性理論は、Prince and Smolensky (1993) および, McCarthy and Prince (1993) などによって提唱されている文法理論であり、規則による派生を認めないという点において、生成文法とは大きく異なるものである。最適性理論においては、普遍文法 (Universal Grammar) はある入力 (基底表示) に対して、その出力 (表層表示) となることのできる複数の候補を与えるものである。そして、普遍文法は出力の適格性を規定する適格性制約の集合を提示する。これらの制約はすべて普遍的なもので、個別言語的な制約は考えない。しかし、制約には優先順位に関して序列 (ranking) が存在し、個別文法は制約を個別言語的な制約階層に序列化する。すなわち、言語間、方言間の相違は制約の序列の違いによって説明されることになる。しかしながら、それぞれの制約は相互に矛盾・対立しているので、それぞれの出力候補は少なくとも1つの制約には違反していることになる。これが、最適性理論のもうひとつの特徴である違反可能性 (violability) である。これは、「制約の違反は許される。しかし、違反は最小でなければならない」というものである。より高い階層にある制約の違反ほど違反の程度が大きいと見なされ、違反の数は、問題にはされない。これらの最適性理論にしたがって、屈折と派生 (複

合) の関係を制約に置き換えてみると、次のように考えられる。

- (9) a. DER → INF : Derivation must precede Inflection
 b. INF → DER : Inflection must precede Derivation

この2つの制約の序列化の違いが、複合語における屈折接辞付加のふるまいの違いを引き起こしていると考えられる。

- (10) a. DER → INF > INF → DER
 b. INF → DER > DER → INF

(11)

a.

	DER → INF	INF → DER
arms _u -merchant	*!	
⇒ arm-merchants _u		*
arms _u -merchants _u	*!	*

b.

	INF → DER	DER → INF
⇒ arms _u -merchant		*
arm-merchants _u	*!	
arms _u -merchants _u	*!	*

それぞれのタブロー (tableau) では、一番上に制約が優先順位の高いものから、順に並んでおり、一番左には出力候補が並んでいる。タブローでの空欄はその候補が制約に違反していないことを、*は違反していることを示している。

タブローは左から見てゆき、最初に違反があったところで、その候補は対象から外れる。高い地位の制約に1度でも違反してしまうと、下位の制

約をいくれ満たしても、候補から外される。そのような致命的な違反があった箇所は！が表示されている。(11a)では一般に一番多く見られる派生形である arm-merchants が最適出力となっており、これは DER → INF の制約が高い地位にあることで説明される。すなわち、一般の話し手の多くがこの制約にしたがって語形成過程を行っている。一方、一般的傾向に反して、複合語内部に屈折接辞が付加されている (11b) では、INF → DER の制約の方が、DER → INF より高い地位にあることによって、その語形成過程が説明される。つまり、複合語における屈折接辞の付加の差異は、話し手が持つ制約の序列化の違いによるものだと考えられる。

6. 結語

以上、本稿では、派生接辞 - 屈折接辞の順序付けだけを認める、従来の考え方では不十分であり、屈折接辞 - 派生接辞という順序付けも認める必要があり、これらは絶対的な規則適用が求められる制約 (原則) というよりも、規則適用が緩やかな傾向であることを指摘した。そして、最適性理論の制約の序列化によってこの現象を適切に取り扱えることを示した。また、屈折接辞が複合語や派生語形成の入力になっていることから、Perlmutter (1988) などが主張するように、派生過程を語形成部門で扱い、屈折過程を統語部門で扱うというように2つに分離して考えることなく、いずれの過程も語形成部門で取り扱えることも論証した⁹⁾。

NOTES

† 本稿は西原 (1997) に修正を加え、これを発展させたものである。

- 1) Perlmutter (1988) では分離形態論 (Split Morphology) という用語を用いている。
- 2) Kiparsky (1982) は3層から成る語形成部門を

提案している。

- 3) Booij (1996) は複数屈折接辞などを "Inherent Inflection" と呼び、3人称単数屈折接辞などを "Contextual Inflection" と呼び区別している。
- 4) Bochner (1984), Rice (1985) などでも同様の主張がなされている。
- 5) 詳しくは, Mohanan & Mohanan (1984), 山田 (1987) を参照のこと。
- 6) Booij (1994, 1996) でも同様の提案がなされている。

REFERENCES

- Aronoff, M. 1976. *Word Formation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT. Press.
- Anderson, S. R. 1992. *A-Morphous Morphology*. Cambridge: CUP.
- Bochner, H. 1984. "Inflection in Derivation." *Linguistic Review* 3, p. 411-421.
- Booij, G. 1992. "Compounding in Dutch." *Rivista di Linguistica* 4, p. 37-59.
- Booij, G. 1994. "Against Split Morphology." In Booij, G. & J. van Marle (eds.) *Yearbook of Morphology 1993*. Dordrecht: Kluwer. p. 27-50.
- Booij, G. 1996. "Inherent versus Contextual Inflection and the Split Morphology Hypothesis." In Booij, G. & J. van Marle (eds.) *Yearbook of Morphology 1995*. Dordrecht: Kluwer. p. 1-16.
- Goodglass, H. & J. Berko. 1960. "Agrammatism and Inflectional Morphology." *Journal of Speech and Hearing Research* 3, p. 257-267.
- Hacken, P. 1994. *Defining Morphology*. Hamburg: Olms.
- Jensen, J. T. 1990. *Morphology*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Kean, M-L. 1977. "The Linguistic Interpretation of Aphasia." *Cognition* 5, p. 9-46.
- Kiparsky, P. 1982. "From Cyclic to Lexical Phonology." In H. van der Hulst & N. Smith (eds.) *The Structure of Phonological Representations Part-I*. Dordrecht: Foris. p. 131-75.
- McCarthy, J. J. & A. S. Prince 1993. *Prosodic Morphology I: Constraint Interaction and Satis-*

- faction*. Ms. University of Massachusetts, Amherst and Rutgers University, New Brunswick.
- Mohanan, K. P. 1986. *The Theory of Lexical Phonology*. Dordrecht: D. Reidel.
- Mohanan, K. P. 1988. "Universals in Phonological Alternations." Ms.
- Mohanan, K. P. & T. Mohanan 1984. "Lexical Phonology of the Consonant System in Malayalam." *Linguistic Inquiry* 15, p. 575-602.
- 西原哲雄, 1992. 「語彙音韻論とロマンス借用語」『近代英語協会10年記念論文集』東京: 英潮社. p. 42-50.
- 西原哲雄. 1994a. 「複合語の屈折と慣用化」『ことばの音と形』東京: こびあん書房, p. 230-238.
- 西原哲雄. 1994b. 「語構造のパラドックスと音律構造: 語彙拡散理論との係わり」『甲南英文学』第9号. 甲南英文学会. p. 45-60.
- 西原哲雄. 1997. 「派生と屈折の順序づけ」『長野大学紀要』72号.
- Perlmutter, D. 1988. "The Split Morphology Hypothesis: Evidence from Yiddish." In Hammond, M. & M. Noonan (eds.) *Theoretical Morphology*. San Diego: Academic Press. p. 79-100.
- Prince, A. S. & P. Smolensky. 1993. *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*. Ms. Rutgers University, New Brunswick, and University of Colorado, Boulder.
- Rainer, F. 1996. "Inflection inside Derivation." In Booij, G. & J. van Marle (eds.) *Yearbook of Morphology 1995*. Dordrecht: Kluwer. p. 83-91.
- Rice, K. 1985. "On the Placement of Inflection." *Linguistic Inquiry* 16, p. 155-161.
- Siegel, D. 1974. *Topics in English Morphology*. Ph. D. dissertation, MIT. New York: Garland 1979.
- Strauss, S. 1982. *Lexicalist Phonology of English and German*. Dordrecht: Foris.
- Vogel, I. 1991. "Level Ordering in Italian Lexical Phonology." In Bertinetto, P. M. & M. Kenstowicz (eds.) *Certamen Phonologicum II*. Torino: Resenberg & Sellier. p. 81-101.
- 山田宣夫. 1987. 「厳密循環条件と英語の分節音韻論」『非線状音韻論研究』2号. p. 63-82.
- Zwanenburg, W. 1990. "Compounding and Inflection." In Dressler, W. U. et al. (eds.) *Contemporary Morphology*. Berlin: Mouton de Gruyeter. p. 132-138.